

## 使徒の働き3章11-26節 「イエスに与えられた栄光」

### 1A イエスの名によるいやし 11-16

1B ペテロやヨハネに注目する人々 11-12

2B いのちの君を殺した罪 13-16

1C 神のしもべの拒絶 13

2C 殺人者を選んだ人々 14-15

3C イエスによる信仰 16

### 2A イエスの名による立ち返り 17-26

1B 予め告げられたキリストの苦難 17-21

1C 悔い改め 17-19

2C 回復の時の再来 20-21

2B 預言者たちの子 22-26

1C もうひとりの預言者 22-24

2C しもべによる祝福 25-26

## 本文

使徒の働き 3 章を開いてください。私たちは、前回、ペテロとヨハネが、神殿のところで生まれつき、足のきかない男が、イエスの御名によって立ち上がったところを読みました。私たちは、使徒たちが、主にあった力強い証しを立てるところを見えています。

そこから、主が私たちを用いたいという願いを持っておられること知ります。主に用いられる者たちには、どのような特徴があるのか。一つに、祈る人々であったということです。イエスが父なる神に祈られ、父に近しく生きておられたところから、人々への働きをしておられました。同じように、ペテロとヨハネが、祈りの時間に宮に上っていたことが分かります。祈りによって主に近い者たちには、証しの力が現れます。もう一つは、信仰です。イエスが、命じられて、そのことばに従わせる働きを行われました。手がなえた人には、伸びるように命じられました。ペテロは、主がともにおられることを信じて、足なえの男を立たせる信仰が与えられ、またこの男にイエスを信じる信仰が見えたので、「イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。(3:6)」と命じたのです。

そして、主の証しの力が現れる人の第三の特徴を見ていきます。それは、「主に栄光があることを知っている人」です。主が自分を用いても、器にしかすぎないことを知っていることです。栄光を、その栄光を受けるべき方にお返しすることです。

## 1A イエスの名によるいやし 11-16

### 1B ペテロやヨハネに注目する人々 11-12

<sup>11</sup> この人がペテロとヨハネにつきまとっているうちに、非常に驚いた人々がみな、「ソロモンの回廊」と呼ばれる場所にいた彼らのところに、一斉に駆け寄って来た。

立ち上がった人は、あまりにも喜びで、神を賛美しながら歩いたり、飛び跳ねたりしていました。彼のことは、神殿に来ている誰もが知っているので、「ものも言えないほど驚いた」とあります(10節)。「ソロモンの回廊」は、東の門から入って、「婦人の庭」という神殿の内側の敷地の間にあるところに、南北に延びていた回廊です。外庭、また異邦人の庭とも呼ばれますが、ユダヤ人の入れる内庭の周りを囲っています。その東の部分に南北に延びていたところであると思われます。そこに、一斉に駆け寄ってきました。

<sup>12</sup> これを見たペテロは、人々に向かって言った。「イスラエルの皆さん、どうしてこのことに驚いているのですか。どうして、私たちが自分の力や敬虔さによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。

ペテロは、五旬節の時に聖霊が降られた後で人々が集まって来たところで、主イエス・キリストを宣べ伝えましたが、ここでも同じです。「イスラエルの皆さん」と呼んでいます。これは彼らに対する正式な呼びかけです。「あなたがたは、神に選ばれたイスラエルの民です」ということです。そして、「私たちが」と、主語にペテロとヨハネ自身も入れています。イスラエルの民の仲間として、自分たちも含めて、過ちを犯してはいけないと言っているのです。

そして、「どうして、私たちが自分の力や敬虔さによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか」と言っていますが、ここが大事です。自分自身には全く力も、敬虔なものもないということをペテロたちは言っています。彼らが自分たちに何か力や敬虔さがあるかのように、見つめていました。それを受け入れるのを拒んだのです。事実そうでした、彼はよく分かっていました、自分の力と敬虔さなど、少し脅されただけで、イエス様を三度知らないと言ったのですから、これっぽっちもありません。私たちではない、キリストなのだということです。イエスは、何と言われましたか？「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。(ヨハネ 15:5)」

イエスの名によって立ち上がらせたのですから、イエスご自身に栄光があります。自分自身は、あくまでも用いられている器ですから、器に栄光があるかのようにみなす人々に対して、それは違うことを、はっきりと示さないとはいけません。主にこそ栄光があることを示さなければいけません。それをせずに、自分に何か取り柄があるとかを受け入れると、その人は、主を聖なる方としなかったのです、自分自身を減ぼしてしまいます。

歴代の、イスラエルの王には、後年にこの過ちを犯した人々が多いです。例えば、虐殺を免れて、神殿に匿われて生き残ったヨアシュがいます。彼が七歳で王となり、靈的に育てたのは、祭司エホヤダでした。ところが彼が死んだら悲劇が起こりました。「Ⅱ歴代 24:17-18 エホヤダの死後、ユダの首長たちが来て、王を伏し拝んだ。それで、王は彼らの言うことを聞き入れた。18 彼らは父祖の神、【主】の宮を捨て、アシェラと偶像に仕えた。彼らのこの罪過のゆえに、御怒りがユダとエルサレムの上を下った。」王が、彼らが王の前で伏し拝むのを受け入れたのです。そして、彼らが偶像礼拝をすることを聞き入れています。そして、エホヤダの息子ゼカリヤが、それはいけないことを述べたら、なんと彼を殺してしまいました。ヨアシュには、主のさばきが下されています。戦いで重傷を負ったのですが、家来たちが謀反を企てて、彼を寝台の上で殺しました。

## 2B いのちの君を殺した罪 13-16

### 1C 神のしもべの拒絶 13

<sup>13</sup> アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち私たちの父祖たちの神は、そのしもべイエスに栄光をお与えになりました。あなたがたはこの方を引き渡し、ピラトが釈放すると決めたのに、その前でこの方を拒みました。

ペテロは、はっきりと、「アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち私たちの父祖たちの神」と言っています。どこかの異なる神ではなく、私たちの父祖の神なのだということです。そして、「そのしもべイエス」と言っていますが、これは預言者イザヤが預言した「主のしもべ」を指しています。イザヤ書には、「主のしもべ」の預言が詳細にあり、イエスの生涯がいかにもその預言を成就させているのわかります。例えば、42 章 1 節、「見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々にさばきを行う。」このしもべは、イエスご自身なのだというのが、今、ここでペテロが言っていることです。

そして、このイエスに栄光を神がお与えになったのです。ここでは、彼自身に栄光が行くのではなく、イエスに栄光が行かなければいけないのです。

そして、聖霊が降ってから初めての説教と同じように、ペテロは、彼らがイエスを殺したのだと、その罪をはっきりと示します。ここでは、さらにはっきりとさせています。第一に、ローマ当局に、この方を引き渡したことです。第二に、ピラトは釈放すると決めたのに、拒みました。

### 2C 殺人者を選んだ人々 14-15

<sup>14</sup> あなたがたは、この聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦免するように要求し、<sup>15</sup> いのちの君を殺したのです。しかし、神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。

彼らの罪の第三は、バラバは人殺しなのに、「この聖なる正しい方」を拒んだということです。聖なる方という呼び名は、聖書では神ご自身に向けられています。そして、「正しい方」とは、イザヤ 53 章 11 節から来ています。「彼は自分のたましいの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を負う。」この聖なる、正しい方を拒んで、何と人殺しを赦免させるという、とてつもない不正、悪を行ったということです。そして、第四に、「いのちの君を殺した」ということです。この方はいのちを与える方です。いのちの源は、神であることも、聖書に書かれています。このいのちを与える方ではなく、いのちを取る、人殺しを選んだのです。

しかし、この「しかし」が大事ですね、2 章での説教でもそうでした、「神はこのイエスを死者の中からよみがえらせました。私たちはそのことの証人です。」メシアである方、聖なる方、正しい方、そしていのちの君である方を、あなたがたは殺したが、神が死の中に閉じ込めたままにするわけがないということです。そのよみがえりを見た証人です、私たちは、ということです。

### 3C イエスによる信仰 16

<sup>16</sup> このイエスの名が、その名を信じる信仰のゆえに、あなたがたが今見て知っているこの人を強くしました。イエスによって与えられる信仰が、この人を皆さんの前で、このとおり完全なからだにしたのです。

こうやって、ペテロはイエスの名を宣べ伝えました。この方がよみがえられ、この方は栄光の御座に着かれており、その御名によって彼が完全な体になったのだ。このいやしが、主の復活の明らかな証拠なのです。ここで大事なものは、イエスの名を信じる信仰をペテロが強調していることです。自分の信心深さや敬虔から出たものではないのだ、ただイエスの名を信じただけなのです。

しかも、その信仰さえ、「イエスによって与えられる信仰」ということです。これが、先週、説明した信仰の賜物です。まず、主ご自身が事を行われます。それは、私たちがその恵みをただ信じて、現れます。しかし、その信仰さえ、神から与えられている賜物なのです。ですから、私たちが何か、そのわざに入り込む余地がないのです。

牧者チャックが、教会の女性が、自分の夫をキリストに導いてほしいと頼みました。彼は、非常に優秀な、精神科医でした。けれども無神論者でした。彼と奥さんケイを、その家庭の夕食に招くという設定で、彼女とケイさんは途中で席を離れて、二人だけになりました。そして、彼との会話で、ついに旦那さんはイエスを自分の主として信じて、受け入れました。

そして、その女性は次の日、教会の事務所に入り込んできて、興奮して、こう言いました。「チャックさん、あなただったらできると思っていました。誰ができるかといったら、あなただと思っていた

のです。チャックさん、あなたは最もすごいです。」それで、チャックは制止しました。彼は精神科医で、脳外科医でもありました。彼のメスさばきはすごく、難関な手術を成功させたとします。次の日、私とそのメスを見て、「あなたは、なんとすばらしいメスでしょうか！あなただったら、この困難な手術を成功させると思っていたわ。」執刀医ではなく、メスをほめたたえたら、あまりにも滑稽です。けれども、今、信仰に導いたチャックをほめたたえていたら、やっていることは同じだと。<sup>1</sup>

## **2A イエスの名による立ち返り 17-26**

次にペテロは、預言者たちのことばを思い起こさせて、それで主に立ち返るように勧めます。

### **1B 予め告げられたキリストの苦難 17-21**

#### **1C 悔い改め 17-19**

<sup>17</sup> さて兄弟たち。あなたがたが、自分たちの指導者たちと同様に、無知のためにあのような行いをしたことを、私は知っています。

ペテロが、ここで彼らに憐れみの言葉をかけます。「さて兄弟たち」と呼びかけていますね。そして、「無知のためにあのような行いをした」と言っていますが、イエス様が十字架の上で何と祈られたか知っていますね。「ルカ 23:34 父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」自分の罪のゆえに目が見えなくなっていました。自分が何をしているか、分かっていませんでした。パウロもかつて迫害者で、後にテモテに言いましたが「Ⅰテモ 1:13 しかし、信じていないときに知らないことでしたことだったので、あわれみを受けました。」とあります。私たちも、キリスト者に対して理不尽に反抗的で、不義を行っている人について、「神を知らないの、しているのだ」という憐れみの心を持つ、必要があります。

無知というのは、必ずしも情報がないということではありません。今、例に挙げましたように、十字架の上のキリストを罵った祭司長たちは、主の行われたしるしを見聞きしたのにも関わらず、そのようなことを行ったのです。けれども、霊的に盲目にされていたため、それを無知と呼んでいきます。対して、敢えて、故意に罪を犯すという時は、すでに目が開かれて、真理を知ったのに、それでも、その恵みを拒むことを意味します。

<sup>18</sup> しかし神は、すべての預言者たちの口を通してあらかじめ告げておられたこと、すなわち、キリストの受難をこのように実現されました。

2章の説教では、「2:23 神が定めた計画と神の予知によって」と言っていました。ここでは、「すべての預言者たちの口を通して」と言っています。ペテロや他の弟子たちは、復活したイエス様から直接、キリストが苦しみを受け、それから栄光を受けることについて、聖書全体からの解き明か

---

<sup>1</sup> <https://study.bible/lesson/453>

しを聞きました。それに基づいて、今、キリストの受難が実現したのだとペテロは説いています。こんなことはあってはならない罪、聖なる正し方、いのちの君を殺すなどとんでもない罪なのですが、しかし、それさえも神は予め預言者たちを通して告げておられたのです。

<sup>19</sup> ですから、悔い改めて神に立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はぬぐい去られます。

悔い改めて、神に立ち返ることを勧めています。悔い改めるのは、思い直すことです。神に背いていたところから思い直すことです。そして、神に立ち返ります。ただ信じればよい、というものではありません。まことの信仰は、悔い改めと共にあります。

2章の説教では、「罪が赦される」ことを語りましたが、ここでは悔い改めたら、「ぬぐい去られます」とあります。当時の文書は、インクのようなものではなく、書いても文字通り、拭い去ることができそうです。私たちの感覚だと、データの抹消ですね。イエス様が苦しまれたことによって、私の罪のデータが抹消されたのです。ですから、最後の審判の時に、行いの書には、私の罪がそこに書き記されていないということなのです。まるで一度も罪を犯したことのないように記録されている、それはキリストの身代わりの死のゆえです！

### 2C 回復の時の再来 20-21

<sup>20</sup> そうして、主の御前から回復の時が来て、あなたがたのためにあらかじめキリストとして定められていたイエスを、主は遣わしてくださいませ。<sup>21</sup> このイエスは、神が昔からその聖なる預言者たちの口を通して語られた、万物が改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。

ペテロは、ここから「回復の時」そして「万物が改まる時」について語ります。

私たちキリスト者は、天の御国と言え、死んだ後に行く死後の世界というように捉えがちです。しかし、それは間違っています。天とは、神が王座に着いておられるところです。つまり神が王として支配しておられるところが、神の国です。それが、地上ではなく、第三の天と呼ばれる、神の御座のあるところでもあるし、イエスが地上におられた時は、主がおられるところが神の国でした。そして、イエス様が戻って来られたら、キリストが統べ治める地上における神の国が立てられます。ユダヤ人の待ち望んでいた神の国は、このような地上でメシアが統治する、目に見える王国であります。ユダヤ教では、ティクン・オラムと言います。世界の回復という意味です。

「回復の時」とは、「アダムの子によって、世界に罪が入ってしまって、損なわれてしまった地を回復する」という意味です。これが、主の第一の目的です。それは、神から離れた魂が神に立ち返るだけでなく、呪われてしまった地が神の目的の通りに建て直されることを神は願われています。

そして「万物の改まる時」と言っています。背後にある律法は、レビ記 25 章にあるヨベルの時です。五十年に一度来ます。主がイスラエル十二部族に土地を割り当てます。しかし、自分に割り当てられた土地を、貧しさのゆえに売り渡さないといけないことがあるでしょう。そのようにして、主の与えたものが、人間の所有となってしまいます。しかし、五十年後、どんなに負債のある人でも、土地を失った人でも、すべてが帳消しになり、元の所有の地に戻ることにできるようにするものです。これが人が犯した罪によって負債ができ、個人が、また社会が、そして世界が負い目を追っているけれども、それらをすべてリセットして、神の初めの姿に戻すということです。そして、それが、天に留まっているイエス様が、戻ってくる時に万物が回復するということです。

そして、「昔からその聖なる預言者たちの口を通して語られた」とありますが、何度となく預言者たちが語ってきたことです。それが、預言者たちが何度も何度も語ってきたことであり、私たちによく知られているのが、弱肉強食の動物界が、獅子が牛と共に草をはみ、乳飲み子がまむしの住む穴に手を入れても害を受けないという世界です(イザヤ 11 章)。

## 2B 預言者たちの子 22-26

続けて、預言者のことばによって、彼らがイエスの名によって神に立ち返ることを説きます。

## 1C もうひとりの預言者 22-24

<sup>22</sup> モーセはこう言いました。『あなたがたの神、主は、あなたがたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたがたのために起こされる。彼があなたがたに告げることすべてに聞き従わなければならない。<sup>23</sup> その預言者に聞き従わない者はだれでも、自分の民から断ち切られる。』

ユダヤ人にとって、最も偉大な預言者はモーセです。申命記の最後に、モーセの生涯がまとめられています。「34:10-12 モーセのような預言者は、もう再びイスラエルには起こらなかった。彼は、【主】が顔と顔を合わせて選び出したのであった。それは、【主】が彼をエジプトの地に遣わして、ファラオとそのすべての家臣たち、およびその全土に対して、あらゆるしるしと不思議を行わせるためであり、また、モーセが全イスラエルの目の前で、あらゆる力強い権威と、あらゆる恐るべき威力をふるうためであった。」

このような預言者ですが、彼が前もって、「わたしのような預言者があなたの方のために起こされる。」と預言していました。それで、ユダヤ人は待っていたわけです。事実、福音書の中でも何度となく、「あの預言者(ヨハネ 1:21)」であるとか、「まことにこの方こそ、世に来られるはずの預言者だ。(ヨハネ 6:14)」という言葉で、期待していたことが分かります。そして、もしこの預言者に聞き従わないのならば、民から断ち切られるという警告があるのです。ペテロは今、その預言者とされたイエスが来たのだ、と言っているわけです。

<sup>24</sup> また、サムエルをはじめ、彼に続いて語った預言者たちもみな、今の時について告げ知らせました。

モーセの次に現れた、大きな預言者としてはサムエルです。士師の時代が暗黒でしたが、サムエルが立てられて霊的復興がイスラエルの間で起こりました。そして、ずっと預言者が何度となく現れました。彼らが、それぞれの状況の中で世界を回復する方が来られると預言しており、その方が来られたのだということを、ペテロが述べているのです。

### 2C しもべによる祝福 25-26

<sup>25</sup> あなたがたは預言者たちの子であり、契約の子です。この契約は、神がアブラハムに『あなたの子孫によって、地のすべての民族は祝福を受けるようになる』と言って、あなたがたの父祖たちと結ばれたものです。<sup>26</sup> 神はまず、そのしもべを立てて、あなたがたに遣わされました。その方が、あなたがた一人ひとりを悪から立ち返らせて、祝福にあずからせてくださるのです。」

今、聞いているユダヤ人に、このようにして預言者たちの預言によって綿々と受け継がれてきた神の言葉があり、あなたがたはその預言によって生きるのだということを、「預言者たちの子」という言葉で言い表しています。

そして話を「契約の子」に移しています。こちらは、アブラハムとの神の契約です。その契約の中にも入っていますが、そこでの約束が、「あなたの子孫によって、地のすべての民族は祝福を受けるようになる」であります。その子孫とはイスラエルの民というだけでなく、民から出てくる一人の子孫をもさしています。それがキリストです。キリストがアブラハムの子孫から出てきて、この方によって祝福がすべての民族に与えられます。まず、血縁のアブラハムの子孫が悪から神に立ち返って、彼らが祝福となるようにと励ましているのです。

このようにして、ペテロは、イエスの名によって人を立たせただけでなく、イエスの名にあって、人々を神に立ち返らせようとしています。そこにおいて、自分の信心深さとか敬虔とかの余地はまったくありません。これが、イエスの力強い証しであります。自分はただのしもべ、器であり、この方が力強く働かれることだけを考えればよいのです。